

南港野鳥園の干潟と林（大阪市住之江区）

文・写真 高田 博(NPO法人南港ウェットランドグループ)

南港野鳥園は、今年9月で開園40周年の日本で一番古い人工干潟です。埋立地を干潟にするという難工事は様々な段階を踏みながら、開園20年後の2003年に今の姿に近い干潟となりました。西池干潟を除き、淡水池であった北池と南池は、干潟化に適した地盤高まで沈下した年に海水導入工事（北池：1995年、南池：2003年）を行い、今や多様な海の生き物が生息する干潟となっています。海藻類、ゴカイ類、貝類、ヨコエビ類、カニ類（ハクセンシオマネキ、イソガニ類など）、ハゼ類といった干潟の生き物が、一見同じ環境に見える干潟で、自分達に適した場所で生活しています。多様な生き物が生息する野鳥園は、4～5月と8～10月に1万キロ前後を渡るシギ・チドリ類（開園から55種を記録）にとって、大阪湾奥の貴重な中継地（餌場やねぐら）となっています。

園内の林は、アカテガニなど陸ガニが棲む貴重な環境で、夏の夜に、卵を抱えた雌が満潮の干潟に放仔のために歩いてきます。

今後、干潟表層の泥分や有機物の流出防止、海藻類の適度な繁茂、各池特有の生き物生息環境の保全と育成が課題です。



シギ・チドリ類観察会(5月)
北観察所でシギ・チドリ類(チュウシャクシギ・メダイチドリ・トウネンなど)を観察中。



干潟保全作業(7月)
干潟表層の泥を受け、泥の流出を防ぐため、カキを利用した堤防づくりを地元中高生の協力で実施。

夢洲（大阪市此花区）

文・写真 夏原 由博(会長)

2025国際博覧会が開催される大阪市の人工島夢洲は浚渫土、廃棄物などの処分場です。埋立途中に池や塩生湿地、砂礫地などさまざまな環境ができ、多くの野鳥の繁殖や渡りの中継地となりました(図-1)。最大で1500つがいのコアジサシが繁殖し、2004年から2021年の調査で通算で51種のシギ・チドリが、また、1996年には14,432羽のホシハジロが記録されています。ホシハジロの個体数はラムサール条約登録湿地とする条件を満たしています。このように野鳥の生息場所となっているため、2014年に大阪府レッドリストで生物多様性ホットスポットのAランク(最重要地)に指定されました。埋立地にこんなに多数の水鳥が訪れるのは、もともと淀川河口域に干潟があったからです(図-2)。干拓や埋立地の造成によって、かつてあった干潟はほとんど消失しました。しかし、渡りをする水鳥は河口のある湾に餌の多い干潟があることを知っているようです。そのため、人工であっても湿地ができると再びやって来るのです。万博のレガシーとして、湿地を再生して人と自然の共生の場とすべきです。



図-1 夢洲で繁殖するセイタカシギ



図-2 江戸時代の淀川河口
(国立国会図書館ウェブサイト 大阪町中並村々絵図を加工して作成)